

青 鬼

あおおに

せい や て かい ぶつ
聖夜に照らされる怪物

ノプロプス
noprops / 原作

くろ たけんじ
黒田研二 / 著

すずらぎ
鈴羅木かりん / イラスト

卓郎

東部小学校の五年生。頭の回転が早く、決断力と行動力がある。頼れる存在。

タケル

ビション・フリーゼという種類の犬。大切な人々を助けるために、怪物と勇敢にたたかった。人間の言葉はすべて理解しているという事実を知ったひろしの提案で、モールス信号を応用し、言葉を伝えられるようになった。

ひろし

北部小学校の五年生。小学生とは思えない、洞察力と知識がある。なぜ解きが得意。

美香

東部小学校の五年生。幼なじみの卓郎と、いつも一緒にいる。運動神経バツグン。

たけし

南部小学校の五年生。お調子者で臆病。でも、誰よりも友達思いのイヤツ。

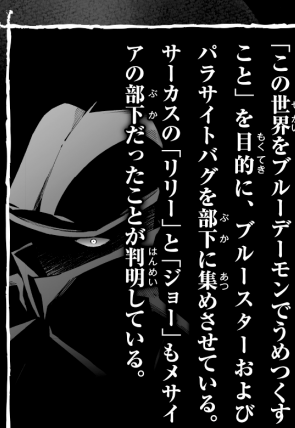


怪物



ブルーベリー色の巨人。人間を見るとおそいかかってくる。ひろしたちはこの夏、「ジェイルハウス」などあらゆる場所での怪物に遭遇したが、犬が苦手であることや、頭が重く泳ぐことができないなどの弱点を突くかたちで、なんとか魔の手を逃れてきた。宇宙から飛来した物質・ブルースターの中に入っていた虫「パラサイトバグ」が体内に入ることが原因で、人間が怪物に変異する可能性があることがわかってきた。

メサイア



「この世界をブルーデーモンでうめつくすこと」を目的に、ブルースターおよびパラサイトバグを部下に集めさせている。サーカスの「リリー」と「ジョー」もメサイアの部下だったことが判明している。

ナオ



北部小学校の五年生。ひろしのクラスメイトで、クロさんとは伯父・姪の関係。



ジョー

リリー

ハルナ先生

ひろし達が通う北部小学校の教師。生徒たちが多数失踪し、閉鎖されることになった碧奥小学校の元・生徒でもある。クロさんの悪事を知り、ひろしたちに協力してくれる。行き場を失っていた親友のユズキを迎え入れ、家で一緒に暮らしている。



クロさん

メサイアの元で「カマロ」という名前です。で、ブルースターを集めていた。ジェイルハウスでのひろしとの会話がきっかけで、メサイアに協力することをやめ、今は独自に行動しているようだ。



ユズキ

ハルナ先生の同級生として碧奥小学校に通っていたが、パラサイトバグを誤って口にしてしまい、ブルーデーモンになった。現在は方をコントロールできるようになり、人間だった頃の姿にも変身できる。



イズミさん

いまは美香の家で飼われている。シーズー犬・マロンを販売していたペットショップの店員。自称・情報通で、いろいろなうわさ話を知っているようだが、あやしい行動が多いためタケルは警戒している。



ウサギ&カメ



都市伝説やオカルトを特集する動画配信チャンネル〈まかふしぎゾーン〉の配信者。主にウサギが動画に出演し、カメは撮影を担当している。ふたりとも〈うらみスノーリゾート〉近くの雪山で動画撮影をしていた際に遭難。その後パラサイト・バグを口にし、ブルーデーモンになる能力を得た。以来ふたりは「みんなも青鬼（ブルーデーモン）になろう！」とブルーデーモン化をすすめるような動画を投稿するようになった。

七瀬未来



ひろしとナオのクラスに転校生としてやってきた病弱な少女。クラスメイトとして同じ教室で過ごすことができたのは1週間ほどで、体調悪化を理由に別の街へと引っ越してしまいました。短い期間ではあるが、同じ本を読んでいたことをきっかけにひろしと交流を深め、ふたりだけの思い出をつくった。



あらすじ

<うらみスノーリゾート>での大事件から数日。有名動

画配信者がブルーデーモンになったことをきっかけに、

「青鬼になろう」と自ら行動する人が増えているようだ。

実際、碧奥町ではブルーベリー色の怪物を目にすること

が多くなっている。人間をおそうことはないようだけど……

スキー場でメサイアの手下たちから告げられた恐ろしい

計画「全人類ブルーデーモン化計画」は着実に進んで

いるのかもしれない。せっかくもうすぐクリスマスがやっ

てくるっていうのに、この街はどうなっちゃうんだろう？

1 変わりゆく世界

冷たい北風が冬毛の先をなでていく日曜の午後。

ぼくはひろし君といっしょに、いつもの散歩道を歩いていた。

家を出発したときにはかろうじて見えていた太陽もいつの間にか姿を隠し、空には灰色の雲が広がっている。冬ごもりにおくれた小さな羽虫が、ぼくの鼻先をかすめていった。こんな低いところを飛んでいるということは、たぶんはねが湿気で重くなっているのだろう。そろそろ雨が降るのかもしれない。いや、この寒さだ。ひよつとしたら雪になるかも。

道ばたに積み重なった落ち葉のにおいを楽しみながら公園の周りを一周していると、公園の向かい側にたつ二階建てのアパートのほうから男性の声が聞こえてきた。

「おい、こら待てよ」

「外に出たらまずいって」

なんだろう？ ぼくとひろし君が同時にそちらへ目をやるとたん、二階の一番はしにあったドアが勢いよく開き、そこから何度見たかわからないブルーベリーの色の怪物が現れた。



怪物はそれほど大きくなかったが、自分のからだのサイズ感を理解できていないのか、頭がひつかかってなかなか外に出てこれられないようだ。両手で壁をつかみ、蒸気機関車の汽笛みたいな声を出しながら、必死で頭をおし出そうとしている。

「ちよつと、うるさいですよ」

となりのドアが開き、眉間にたてじわを寄せたハルナ先生くらいの年齢の女性が顔をのぞかせた。外に出ようとしているブルーデーモンと目が合い、一瞬おどろいた表情を見せたが、すぐさま真顔にもどり、頭をぶんぶんと左右にふる。

「やだやだ、こんな近くにもこいつがいただなんて」

「おい、顔をひっこめろつて」

部屋の中にいる住人に思いきり引つ張られたらしい。怪物は室内に連れもどされ、ドアは音を立てて閉まった。隣人の女性はその様子をあきれ顔でながめている。

閉まったドアが再び開き、今度は髪を金色に染めた若い男性が姿を現した。

「おさわがせしてどうもすみません」

頭をかきながら、隣人にぺこりと頭を下げる。

「あ。さっきの怪物、あんたじゃなかったんだ」

女性はほつとしたような表情をうかべた。

「あれは大学の友人で……ふだんはおとなしいヤツなんですけど、昨日ちよつとイヤなことがあって、それを忘れるためにお酒のみすぎちゃって……」

「昼間からのんでるの？ 情けない。学生ならもつと学生らしいことでストレスを発散しなさいよ」

「はい……すみません」

「イヤなことつて、どうせ女の子にふられたとかその程度のことならならんことなんでしよう？」

彼女の言葉が聞こえたのか、金髪の男性の部屋の奥から再び蒸気機関車の汽笛が鳴りひびく。

「くだらないとはなんだ？ 俺は本気だったんだぞ！」

野太い声がぼくたちのところまで聞こえてくる。女性の推測は凶星だったらしい。

「本当にすみません。よつばらつて感情のコントロールがうまくできていないみたいで」

金髪君は平謝り。彼はなにも悪くないのに、だんだん気の毒に思えてきた。

「まさか、あんたも怪物だったりしないわよね？」

「いえ、俺はそういうのにまつたく興味ないので」

「絶対にやめてよ。隣人が怪物だなんてわかったら、ますます住人が減っちゃやうから」

「おぼさん、なーんにもわかってないなあ。そんなことじゃ時代に取り残されちゃうよ」

ブルーデーモンの悪態に女性の顔色が変わった。

「すみません。これ以上さわいだりしないよう、しつかりといい聞かせますので。それでは失礼

します！」

よくない空気を察した金髪君はバカていねいに頭を下げると、逃げるようにドアを閉めてその場から消えた。

ひろし君が再び歩き始めたので、ぼくもそのあとに続く。

「ちよつと……おばさんつてだれのことよ？ 出てらつしやい！」

女性の怒鳴り声と乱暴にドアをたたき音を聞きながら、ぼくたちは足早にその場から立ち去った。

人気動画配信者のウサギさんが自身のチャンネルへまかふしぎぞーん〜で、ブルーデーモンに変貌する動画を公開したのは今から二週間前。へうらみスノーリゾートの騒動から一週間が経つたころのことだった。

『青鬼になって最初に感じたのは脳の活性化。頭の回転が速くなって、今まで思いつくことのできなかつた新しいアイデアがぼんぼんとうかんでくるようになつちやつた。記憶力や集中力も高まるから、勉強や仕事もすいすいとはかどるようになるぞ』

ウサギさんは動画の中で、ブルーデーモンの利点を熱く語った。

『頭がよくなるだけじゃない。パワーもおどろくほどアップするからびつくりだ』

分厚い漫画雑誌をいともたやすく破いたり、十枚重ねたかわらをこぶしで一気に入った割ったりのパフォーマンスに、視聴者はくぎ付けとなったようだ。

『もつとすごいのはこれ。青鬼になると免疫力が異常なくらい高くなって、どんな病気やケガでもすぐに治っちゃう。実際、相手のカメちゃんのホテルのてっぺんから落下したにもかかわらず、足首をねんざしただけで済んだうえ、そのケガも一日と経たないうちに完治しちゃったぞ』

カメさんのケガというのは、へうらみスノーリゾットでの出来事を指しているのだろう。意識を失ってホテルの屋根からすべり落ちたふたりがどうなったかちよつと気になっていたが、やはりたいしたことはなかったらしい。

『そして、これはうそかまことか、まだ検証はできてないんだけど、青鬼は年を



取らない。つまり、ずっと今の若さを保てるってことだ。免疫力が高くて年を取らないってことはもしかして不死身なのかな？ それってかなりすごくない？』

ブルーデーモン化の魅力をひととおり語りつくすと、ウサギさんはテーブルの上に着意された小皿に右手を近づけた。皿の上ののっているカプセルをつまみ上げようとすが、太い指ではうまくいかないようだ。

『ああ、もう！ 青鬼の欠点をあえてひとつあげるとしたら、手先が器用じゃないってことかな。でも、思いつく欠点はホントそれくらい。……ちよつと待って。今すぐ人間にもどるから』
「ひたいに右手の人差し指と中指をおし当て、なにやらぶつぶつと呪文みたいなものとなえろと、怪物のからだはみるみる小さくなり、本来のウサギさんの姿にもどった。

ブルーデーモンははだかなのに、人間になるとなぜか服を身に着けている。以前、クロさんがそのメカニズムについて説明してくれたような気もするが、一体どういうことなのか、いまだばくにはよくわかっていない。

『これ、なんだかわかる？』

人間にもどったウサギさんは小皿の上の青いカプセルをつまみ上げ、視聴者に問いかけた。
『このカプセルの名称は〈エボル〉。〈エボル〉をひとつぶ飲めば、君も青鬼になれるんだ。みんな

なに無料で配布するから、希望者は今すぐメールを送ってくれ。旧式の人間のからだにこだわること必要なんてない。新しい生命体に進化しちやおうぜ』

カプセルの中身はパラサイトバグを細かくくくだいて粉末状にしたものなのだろう。パラサイトバグ——寄生虫という名前やグロテスクな見た目ではみんなが不審がると思ひ、〈エボル〉という名前の薬を用意したにちがいない。

パラサイトバグを提供したのはきつとメサイア一味だ。パラサイトバグの羽化に失敗した彼らは別の方法——人気動画配信者を広告塔に利用して〈全人類ブルーデーモン化計画〉を進めることにしたのではないだろうか？

その目論見どおり宣伝効果はすさまじく、ウサギさんの動画はあつという間に十億回再生を突破。昨日アップされた最新動画によると、〈エボル〉を希望するメールは国内外から殺到。すでに五万人以上にパラサイトバグを送つたとのことだった。

ウサギさんの報告は誇張ではないのだろう。今日みたいに、街なかでブルーデーモンを見かけることはもはやめずらしいことではなくなつた。

これまでぼくたちが戦つてきた怪物たちは、人間全般——あるいはぼくたちに明確な敵意を持つていたため、とても危険な存在だったが、街なかで出会うブルーデーモンは、ただ見た目がグ

ロテスクというだけでふつうの人となんら変わりはない。むしろ、工事現場や大きな荷物の宅配の仕事など、力の必要な職場で活躍し、ありがたがられていたりもする。

雪山での攻防戦からたつた三週間しか経っていないというのに、ブルーデーモンはぼくらの日常にすんなりととけこむまになつていた。

とはいえ、あの不気味な見た目だ。ついさつき見かけた女性みたいに、ブルーデーモンを毛ぎらいしている人たちも大勢いた。〈エボル〉の安全性だつてまだ確認されていない。専門の研究機関によつて調査中だと聞いている。

怪物におどろいてケガをしたとか、青鬼にうちの壁をこわされたなど、ブルーデーモンが関連するトラブルも全国で数多く発生していた。世の中は青鬼化推進派と反対派にまつたつに分かれ、各地で衝突が起こっているらしい。

葉っぱをすべて落としてしまつて寒いのか、ふきつける北風にぶるぶると枝をふるわせているイチヨウの木の間を通り過ぎ、ぼくたちは四つ角を右に曲がつた。

……え？

そこにはこれまで一度も見ることがないタイプのブルーデーモンが待ちかまえていた。青いしつぽを天に向かつてピンとのぼし、四本あしで立っている。丸い顔からは細長い針金のようなも

のが放射状に生えていた。

こちらを警戒しながら、そろそろとネコみたいに近づいてくる。いや、ネコみたいじゃない。顔から飛び出した針金はネコのひげによく似ていた。おそらくもとはネコだったのだろう。

なぜ、ブルーデーモン化してしまったのかはよくわからない。地中にうまつていたブルースターをほり出して中に入っていたパラサイトバグを食べてしまったのか、あるいは「エボル」を入手した方がいいが飲むことがこわくなってそのへんにすててしまった人がいたのかもしれない。

なんにせよ、人間とちがつてネコの場合はちよつとやつかいだ。クロさんの話を信じるなら、人間以外の動物がパラサイトバグを摂取した場合、その動物が人間に強いうらみを持つていなければブルーデーモン化することはないということだった。つまり、目の前にいるネコは人間をともうらんでいる。ひろし君におそいかかる可能性は十分に考えられた。

ひろし君を守らなければ。

ぼくはひろし君の前に飛び出し、ネコ型の怪物に向かって大きくほえた。例外もいるけれど、基本的にブルーデーモンはイヌが苦手だ。それともぼくの声におどろいたらしく、それまでピンと立っていたしつぽを情けなくなつたらし、ぼくたちに背を向けて逃げ出した。

向こう側からつえをついたおばあさんが歩いてくる。ぼくのことをそんなにもイヤだったの

か、ネコ型のブルーデーモンはおばあさんのすぐ横をすり抜けて一目散に立ち去った。

ネコにおどろいてバランスをくずしたおばあさんが、その場にたおれこむ。

「大丈夫ですか？」

ぼくよりも先に、ひろし君がおばあさんのもとにかけよった。

「ああ、大丈夫よ。ちよつとびつくりしたただけだから」

衣服についた砂を払いのけながら、おばあさんは答えた。おばあさんの全身を素早く確認したが、幸いなことにケガはしていないようだ。しかし、おばあさんの持つていたつえは、怪物とすれちがったときにはじき飛ばされたらしく、真ん中からぼつきりと折れてしまっていた。

「あらあら大変」

つえだつたものを手に取り、おばあさんは困った顔をした。

「うちに帰れば別のつえがあるけれど……つえなしでは歩くのが難しいのよねえ」

「ご自宅はどこですか？ 僕が送り届けます」

ひろし君はそういうと、おばあさんに背中を向けてしゃがみこんだ。どうやらおばあさんを背負うつもりらしい。

「そんなことまでしてもらったら申し訳ないよ。つえがなくてもゆつくりだったら歩けるから」

「でも、もうすぐ雨が降ってきますよ。今日はとても寒いので、風邪でもひいたら大変です。どうぞ僕の背中へ」

「だ……」

「心配しないでください。こう見えて、けっこう力はありますから」

「そうかい。じゃあ、お願いしようかね。でも、無理はしないでおくれよ。重かったらすぐに下ろしてくれていいからね」

おばあさんは遠慮がちにひろし君の首へと手を回した。ホントに背負える？ と心配したけれど、ひろし君は軽々とおばあさんをおかきあげた。ぼくは折れたつえをくわえ、ふたりのあとをついていく。

とちゅう、学校帰りの中学生たちとすれちがった。先頭を歩いていた男の子は大きな声でブルーデーモンの話をしている。

「青鬼ってかっこいいよな」

まるでアニメのキャラクターやアイドルの話でもしているかのように、その目はきらきらとかがやいていた。